

「底が突き抜けた」時代の歩き方 536

なんでもかんでも「わかりやすさ」に流れていく弊害

中央公論社が行った「教育再建」をテーマとする懸賞論文の入選作が、『中央公論』06年3月号に発表されている。最優秀作は「正統的な学習の復活を」と題された、愛知県の公立高校教員の長谷川一恵（46歳）の論文である。彼女はそこで冒頭から、『『わかりやすい授業』の弊害』について切り出している。「授業はわかりやすいほうがいいに決まっている」と誰もが思ってきたように、自分もそう思い込んで若い頃からなるべく「わかりやすく」教えるために、《生徒の理解を助けるプリント作りや小テストなど》を行ってきたし、《それで学習効果が高まることを否定する人はいないし、実際、使い次第で効果は抜群だった》が、しかし、本当にそれでいいのかという根本的な疑問が湧き起こってきたのである。

《このところの急激な生徒の変化を見ると、授業で最も大切なことは、何もわかりやすかったり効果的だったりする学習ではないように感じるのだ。それどころか、近年のわかりやすい授業や効果的な学習は、若者の成長を阻むのではないかという気がしてならないのである。

以前の「わかりやすい授業」は、生徒がどこでつまづきやすいか、どう間違えやすいかを予め掴んでいることが重視された。そのためには教員としての経験がものを言った。

しかし、今どきの「わかりやすい授業」は、少々感覚が異なる気がしてならない。

生徒は「わかりやすい授業」を求めるが、具体的には「なるべく勉強をしなくてもできるようになる授業」「予習をしなくてもわかる授業」「先生が答えを教えてくれる授業」に変容してきているのである。》

ここでの「わかりやすい授業」とは、教える側の教えかたの問題に収斂しており、教えられる側がいかに自分のわからなさを克服して、自分にとっての「わかりやすい授業」にしていったかという問題ではもはやなくなっているのだ。授業がわからないのは「わかりやすい授業」をしようと努力しない教える側の責任であって、教えられる側にはなんの責任もないという論理が横行しているのがここにはみられる。授業で最も大切なことは、どれだけ考えることができたかであって、授業がわかりやすかったかどうかではない。「わかりやすい授業」によって思考が素通りしていくなら、それはどう考えてもよい授業とはいえない。逆にわかりにくい授業であっても、そこで多くのことを考えることができるなら、それはよい授業なのである。授業を頭をせっせと耕す訓練とみなすなら、頭をたくさん使う授業こそが切に求められなくてはならないのだ。

《生徒は授業を受けるとき、労力をかけるのをひどく厭^{いと}うようになっている。それで、

先生はなるべく「わかりやすい授業」を心がける。プリントを作り、易しく丁寧に教え続ける。しかし、先生が「よりわかりやすい授業」を続ければ続けるほど、生徒はやや困難な事態に直面すると次のように思い始める。

「自分がわからないのは、わかりにくい授業のせいではないか。先生の教え方がもっとわかりやすければきっとできるはずだ。だから、自分がわからないのは先生のせいだ。決して自分は悪くない」》

「わかりやすい授業」は考えない授業であって、教師も生徒も考えることから迂回し、考えることに怠惰になっていく傾向が指摘されている。「わかりにくい授業」だからこそ、より一層自分の頭を駆使して考えなければならないのに、自分の頭で考えたくないために「わかりやすい授業」を求めるのであれば、それは思考の怠惰以外のなにものでもない。ここには自分を鍛えるという発想が根本的に欠落している。「わかりやすい授業」のなかで自分が考えることをやめていくのであり、「わかりにくい授業」のなかで自分が考えていった分量だけ、わかってくることの悦楽すら、「わかりやすい授業」のなかで奪われていくのである。自分がわかるようになるのはなによりも自分自身の力であって、自分にわからせることは教える側の義務とってしまうこと自体、無知と傲慢にほかならない。

《昔の生徒は、授業がわからないときには自分の理解力が不足していると考え、自分でさらに勉強をした。ところが、今どきは、原因の多くを先生に求める。授業進度が速いと感じれば、自分が予習をするより先に、先生にもっとゆっくり進んでくれるよう求める。それで、要求に応じて「ゆっくり」「ていねいに」教えてくれる先生を良い先生だと判断する。

こういった高校生の思考は、あちこちで発表されている「家庭学習時間が少ない」という調査結果の裏付けにもなるだろう。

また、彼らの考え方には、学習以外においても大きな落とし穴がある。

人間がまともな大人になるために必要とするものは、どんな生き方をしようとどんな仕事に就こうと「それなりの忍耐」であるはずだ。これは、学習においては自ら努力する姿勢を意味する。その育成を損ねているのが、実は、意外にも「わかりやすい授業」だったということにもなるのだ。》

では、《自ら努力する姿勢》の《育成を損ねている》、その「わかりやすい授業」を行っているのは一体、誰か。《要求に応じて「ゆっくり」「ていねいに」教えてくれる先生を良い先生だと判断する》生徒に迎合して、「わかりやすい授業」に励んでいるのは誰なのか。筆者を含む教師が、「授業はわかりやすいほうがいいに決まっている」という教条に、なんの疑いもなく素直に従ってきたからではなかったのか。筆者はその教条に途中で疑念を抱くようになったが、多くの教師は依然、「わかりやすい授業」のほうが自分にとっても生徒にとっても非常にラクであるから、そして生徒が一見わかったようにみえる効果を信じて邁進しつづけているのではないのか。「わかりやすい授業」

は生徒にとってだけでなく、教師自身にとっても考えない授業なのである。生徒がほとんど頭を巡らせなくてもわかるように工夫に工夫を重ねる授業の考案に没頭することによって、教師自身、生徒たちに真に伝え、教えなくてはならない肝心なことを考えなくなってしまふのだ。

「なるべく勉強をしなくてもできるようになる授業」を押し進めることによって、「わかりにくい授業」に生徒を対面させることの苦労を回避してきたのは教師であるし、「予習をしなくてもわかる授業」で生徒の点数をいかに積み重ねていくか、に血道を上げてきたのは紛れもなく教師だろう。「先生が答えを教えてくれる授業」を通じて、生徒が自分の頭で考える時間の長さに付き合いきれずに、思考の訓練を暗記の訓練に変えていったのはやはり教師ではなかったか。その結果、そんな教師の風向きを感じ取った生徒が自分の努力を棚に上げて、「わかりやすい授業」をやるなら、とことんやってくれ、というふうになってしまったのではなかったか。『『わかりやすい授業』の弊害』にいつまでたっても気づこうとしないところに、教師自身が考えることのない産物としての「わかりやすい授業」が浮き彫りにされているようにみえる。

世界は一向にわかりやすすくないのに、そもそも授業だけをわかりやすくして一体、なんになるのだろうか。授業がわかりやすくなれば、問題を解くのもわかりやすくなるのだろうか。他人が言っていることも、わかりやすく聞き取ることができるのだろうか。「わかりやすい授業」は自分自身をもわかりやすくするのだろうか。複雑さを増してますます混沌の度合いを強めていく社会の中で生きなければならないのに、「わかりやすい授業」を受けつづけることにどんな意味があり、なんの役に立つというのだろうか。「わかりやすい授業」をたえず心掛けている教師は、目の前の生徒がその授業の影響を受けてどのように変わりつつあるのか、にどれほど細心の注意を払っているのだろうか。「わかりやすい授業」は教師も生徒も共に、怠惰へと追いやっていくものであることは疑いを挟む余地はない。

《人間がまともな大人になるために必要とするものは、どんな生き方をしようとどんな仕事に就こうと「それなりの忍耐」であるはず》なのに、「わかりやすい授業」によって学習での《自ら努力する姿勢》としての忍耐の《育成を損ねている》と、筆者は批判する。「わかりやすい授業」が怠惰に^{なび}靡き、「それなりの忍耐」を培っていく訓練とは全く逆方向にあるとして、そう指摘する筆者にも決定的に欠落しているのは、人間は勉強をして「まともな大人になる」ことを目指さなくてはならないという、かつて共有されていた国民的合意が大きく揺らいでいる時代の空気を吸って生徒も教師も日々を生きていることに対する感受性であろう。「まともな大人になる」ということが、見えなくなりつつあるのだ。であれば、「まともな大人」を目指して勉強をすることの意味も見えなくなりつつあるにちがいない。そのなかで学習において《自ら努力する姿勢》をどのようにしてかたちづくっていくことができるのだろうか。「それなりの忍耐」がどこから湧き上がってくるというのだろうか。

《昔の生徒は、授業がわからないときには自分の理解力が不足していると考え、自分でさらに勉強をした》のに、《今どきは、原因の多くを先生に求める》、つまり、教師にこちらの《要求に応じて「ゆっくり」「ていねいに」教えてくれる》ことを願っている、と筆者は嘆息する。が、しかし、なぜそうってしまったのか、については考えようとはしない。教師が生徒に媚びる以上に、「わかりやすい授業」のなかでしか学習における生徒との絆が得られなくなってしまう彼らの鬱屈をあえてみようとはしない。昔の生徒が《自分でさらに勉強をした》のは、勉強をすることによって「まともな大人になる」ことを誰もが望んでいたからだ。勉強をすれば「まともな大人になれる」と多くの人が信じ込んでいたのである。では、「まともな大人」とはどんな大人であるのか、と改めて問うまでもないほどに「まともな大人」のイメージは確固としていたのだ。

なんのために勉強をするのか、がそれほど明確ではなくなってきた今どきではしたがって、なんのために学校に行かなくてはならないのかという自問も次第に募ってくるようになった。学校に行くことが当然ではありえなくなってくるなら、学校で授業を静かに受けることも当然ではありえなくなってくる。授業がどうしても受けなければならぬものでなくなってくるなら、「わかりにくい授業」の前で我慢しなければならない理由も困難になってくる。「わかりにくい授業」によって《自ら努力する姿勢》をかたちづくるどころか、なんのために受けなくてはならないのかがわからなくなりつつある授業の前から生徒を一掃することになってしまう筈だ。教師からすれば、元も子もなくなる事態に陥ることになり、教師失格の烙印を押されることになるのだろう。学校から遠去かり、授業から遠去かり、勉強から遠去かろうとしている生徒をなんとか繋ぎ止めるために、教師は必死で「わかりやすい授業」を心掛けてるようにみえる。しかし、筆者もいうように、どう考えても「わかりやすい授業」には勉強—学習の未来がないことも確かなのである。

《授業時数も減り、家庭学習時間も当てにならないとなると、少ない学習時間で高い効果を上げる「効果的学習」が望ましいということになる。社会通念上も是とされるだろう。

しかし、私は、これこそ大きな間違いにほかならないと考える。先進国としての国家の弱体化に繋がるとさえ危惧する。何も大げさに言っているのではない。

「効果的学習」とは「無駄のない学習」で、要は、少ない努力で最大の効果を生むように、もっと逆説的に言えば、かけた努力に無駄を出さないことを目的とする学習方法である。効率の点で悪かろうはずがない。

しかし、この概念には裏がある。「無駄な努力はするな」である。なぜか。

かけた労力や努力のすべてが活かされる「最大の成果」とは、あらかじめ想定された範囲内のものにならざるをえないことに注意しなければならない。なぜなら、効率や能率を優先して物事をなすためには、無駄な労力を最小限にする必要がある。そのためには、まず最初に、必ず到達可能な目標を設定し、さらに、その目標に見合う労力を想定しなければならない。到達できるかどうかかわからない目標は、無駄な労力をしかねない

という点で、最初から否とされる。かける労力には絶対に無駄が出ないよう気をつけなければならない。

よって、勉強の目的が「努力して学習に臨むという姿勢」から「無駄な努力をしないための目標と労力の管理」に変質してしまうのである。それで「何を学習するか」は、「役に立つかどうか」が判断基準になる。》

高校教員である筆者は、怠惰な「わかりやすい授業」が《少ない学習時間で高い効果を上げる「効果的学習」》を目指すことになるのは必然だと言う。「わかりやすい授業」によって生徒ができるだけ思考の労力を払わずにわかるようになること自体が、すでに「効果的学習」とみなされているからだ。自分自身の思考力でわかるようになることに時間を掛けるよりも、教師から答えを教えてもらって速くわかることのほうが時間を短縮できるなら、それはどうやら「効果的学習」ということになるらしい。生徒自らが苦労を重ねるなかで答えを掴み取ってくるよりも、教師から完璧な答えを与えてもらうことが「効果的学習」ということになるなら、「効果的学習」というものはいかに自らの頭でじっくりと考えるプロセスを省略するものであるか、ということになるだろう。

「効果的学習」が「無駄のない学習」と同義になる響きから、無駄のない人生→効果的の人生といった造語が連想されてくる。絶えまない学習によって人生が築き上げられていくと考えるなら、「効果的学習」が効果的の人生を意図することになるのは避けられない。

「無駄のない学習」という一見聞こえのよい言葉も、人生に無駄のない人生などありえないという文脈のなかで把握するなら、学習に「無駄のない学習」などありえないということにも気づく筈だ。つまり、無駄であることを理解できるようになること自体が最大の学習にほかならない、ということに気づかないような学習そのものが無駄な学習といってよい。無駄であることが理解できれば、なにが無駄でないかも理解できるようになるのであり、そのことによって真の「効果的学習」が促進されていくだろう。したがって、「効果的学習」とは本来的に「無駄のない学習」ではなく、無駄に気づいていく学習プロセスでなければならないのだ。

そう考えるなら、「無駄な努力はするな」ではなく、「無駄な努力」であることに気づく努力を払え、ということになるだろう。「無駄な努力はするな」というスローガンが致命的なのは、なにが「無駄な努力」であって、なにが「無駄な努力」でないかが全く不問に付されているからだ。要するに、人は「無駄な努力」に気づいて初めて「無駄な努力」をしなくなるのであって、気づかない間は「無駄な努力」を効果的な努力と思い込んで、一生懸命「無駄な努力」に邁進しつづけるものなのだ。だからこそ、自分のやっていることが「無駄な努力」であることに気づくようになるような学習であるかどうか、「無駄な努力」から抜けだす最大の分かれ道なのである。逆説的に言えば、「無駄な努力」であることに気づくために、「無駄な努力」を払え、なのだ。「無駄な努力」をしなければ、「無駄な努力」であることに気づく機会からも遠ざかってしまう。

しかしながら、筆者は「無駄な努力はするな」というスローガンそのものに立ち止ま

って考えるのではなく、そのスローガンによって《到達できるかどうかかわからない目標は、無駄な努力をしかねない》とみなされ、《まず最初に、必ず到達可能な目標》が設定されていく「わかりやすい授業」の行きつくべきところに視線を注いでいる。できるかどうかまずやってみる、チャレンジしてみるという意力は発揮されることなく、予めできることしかやらないという意力の衰退が顕著となってくる。不可能ゆえに我挑戦す、という気概はすたれ、可能な中を我走りまわる、という体たらくに陥ってしまうのだ。《よって、勉強の目的が「努力して学習に臨むという姿勢」から「無駄な努力をしないための目標と労力の管理」に変質してしまう》ことになる。無駄であるかどうかは明らかになる前から、無駄と決めつけられて、成果がはっきりしないものには手を出さないという精神がかたちづくられていく。

勉強の目的が「無駄な努力をしないための目標と労力の管理」になってしまうなら、近視眼的な速効性に集中することになるのは当然だから、《「何を学習するか」は、「役に立つかどうか」が判断基準になる》のは目にみえている。無駄な労力であるかどうかは「役に立つかどうか」によって測られ、無駄であるということがどういうことかが問われないように、「役に立つ」ということもどういうことかが問われない。無駄であるかどうかはわからないギリギリのところ立つこともないように、「役に立つ」かどうかはわからないギリギリのところ立つこともないのである。要するに、人間は無駄であるかないかを超えた次元で生きる存在であるように、「役に立つ」かどうかを超えた次元で生きなくてはならない存在であることが問われているのだ。

《高校生にもなると、多くの生徒がこの種の合理的な考え方に染まってくる。だから、「受験に必要な科目か否か」で取り組みの程度が決まる。また、合格が目的であるならば、合格最低点で合格することが最も望ましく（信じられないかもしれないが）、それ以上の学習は必要がないと考える生徒さえ出てくるのである。対効果率を高めるのにこれほど確実な考え方はない。

しかし、こういった考え方にに基づく学習は、はっきり言って学校でなすべき勉強であるわけがない。なぜなら、学校で学ぶべきことは、より高度な学問に繋がるべきもので、学問の「最大の成果」とは、決して想定されないからだ。古来、人間が学問に求め続けてきたことに「ここで終わり」は一つもなかったし、今後もあるはずがない。ところが、今の生徒の学習、将来の学問に対する姿勢は、人間が長年にわたって学問にかけてきた努力と情熱を真っ向から否定していると言えるのだ。》

筆者は、「役に立つかどうか」を判断基準とする「無駄な努力をしないための目標と労力の管理」を《この種の合理的な考え方》とみなし、高校生が「受験に必要な科目か否か」を選別し、合格最低点での合格を望むことについて、《対効果率を高めるのにこれほど確実な考え方はない》と評する。もちろん、肯定的でありえないのは明瞭だが、「合理的な考え方」であるわけでもないし、《対効果率を高めるのにこれほど確実な考え方はない》ということにもならない。もし今どきの高校生の身の処し方を「合理的な

考え方」とみるなら、その「合理的な考え方」は一方向的に否定されなくてはならないことではない。『日本語大辞典』によれば、《理性によって納得できるさま》や、《正しい論理にかなっているさま》の謂ではなく、《無駄を省き、最大の効果をあげるさま》の謂で「合理的」という言葉を持ちだしてきているとして、その謂での「合理的」がよいくないということはけっしてなく、むしろその「合理的」であることは今後もますます推進されていくにちがいない。

《無駄を省き、最大の効果をあげる》こと自体に問題はなく、無駄が「役に立つかどうか」を判断基準としてすべて切り捨てられてしまうところに問題があるのだ。高校生が《この種の合理的な考え方に染ま》るところに問題があるのではなく、逆に合格最低点での合格に嵌め込まれた学習しかしなくなっている合理性のなさに問題があるといつてよい。改めて強調せざるをえないが、《無駄を省き、最大の効果をあげる》ためには、なにが無駄であるかに気づかなくてはならない。「合理的」であることは、無駄を省くために無駄を知っていることが前提になっており、無駄についてなにも知らない高校生にとって「無駄な努力をしない」ということが大きな無駄につながっていく虞があるという不合理さに染まっているとみることができる。同様に、合格最低点以上の学習の必要のなさは、学習というものが合格目的の設定をたえず逸脱するところから真に始まることを考えるなら、合格目的に収まった学習方法について《対効果率を高めるのにこれほど確実な考え方はない》と、反語としても評価の仕方におかしさを感じられる。

そのおかしさは、《学校で学ぶべきことは、より高度な学問に繋がるべきもの》と筆者が先験的に思い込んでいるおかしさに連関している。むしろ逆に、《学校で学ぶべきことは、より高度な学問に繋がらないかたちで行われているが故に、「わかりやすい授業」に落ち込んでいくのではなかったか。学校で学んできたことは、つねに学問の外にありつづけていた。学校そのものがたえず学問を遮ってきたのである。だからこそ、《今の生徒の学習、将来の学問に対する姿勢は、人間が長年にわたって学問にかけてきた努力と情熱を真っ向から否定していると言える》のであって、《学校で学ぶべきことは、より高度な学問に繋がるべき》であるのに、今どきの生徒の学習姿勢は全くそうではないということではない。

《このような学習態度で受験を済ませて高校生は大学に進学する。そして彼らが歩もうとする学問への道は決まってくる（否、人生そのものもそうであろう）。

勝算のあることにしか臨まなくなる。

この姿勢で、今後日本から優れた研究が生まれるだろうか。新進気鋭の学問とは、前人未到の地へ勇気を持って一步を踏み出す行為であろう。努力が報われるかどうかかわからない世界への挑戦であろう。なのに、幼少時から、子どもは想定された結果だけを求める学習方法を身につけて育つ。そんな彼らが大人になって果敢な挑戦を企てるだろうか。

授業時間を減らし、効果的な学習を推し進めてきた今の日本は、事實は、本来あるべき学問の姿を否定する方向で教育を施していたのだ。これで先進国としての国の将来に

不安を感じないほうがおかしくはないか。

学校でなすべき学習は、単なる知識の習得だけではない。知識の習得を通して子どもは学問という奥の深い人間独自の世界を垣間見るのだ。安易に到達できるものではないことを知って「忍耐」を体得し、遠い将来の人生にも備える。しかし、「わかりやすい授業」と「効果的な学習」は、こういった正統的学問への道から子どもを逸らすのである。「効果的な学習」という聞こえのいい言葉は、その陰に思わぬ陥穽を隠し持っていたのだ。》

せっかく『『わかりやすい授業』の弊害』と『『効果的な学習』の陥穽』に気づいて論を立てながら、《勝算のあることにしか臨まなくなる》高校生の学習態度を憂慮し、《先進国としての国の将来に不安を感じ》るだけで、そのような彼らの学習態度もまた、筆者が教員として所属する学校のなかで身に着けさせられてきたことをみようとしないし、そこに問いを突き入れさせようともしない。進学指導において「受験に必要な科目か否か」の取り組みの態度を決めることになるのは高校生本人であっても、合格目的のためにそのような取り組みの態度を生徒たちに醸成するよう仕向けていくのはやはり学校なのである。合格最低点であれなんであれ、合格すれば同じだから、合格最低点以上の学習の必要性のなさの雰囲気をつくってきたのも、やはり学校ではなかったのか。そもそも進学指導というものが合格目的を至上とするが故に、合格最低点《以上の学習は必要がないと考える生徒》を生みだしてきたのではなかったか。

《勝算のあることにしか臨まなくなる》姿勢は、日本の社会がその方向に進みつつある空気を生徒が敏感に感じ取ってかたちづくられていくだけでなく、それ以上に学校で培われていく学習態度がそんな姿勢とけっして対立することなく、むしろ受け入れていく気運に合わせてかたちづくられているように思われる。自分たち教員は《より高度な学問に繋がるべき》学習を学校で追求し、生徒に伝達しようとしているのに、生徒のほうが「わかりやすい授業」と「効果的な学習」に流れて、《正統的学問への道》から逸脱するようになってしまった、自分を含む教員もその流れに抗することはできなくなってしまっている、と筆者は声低く主張しているようにさえ聞こえる。もちろん、その主張の最大の問題は、あたかも学校での学習のなかに《より高度な学問に繋が》っていく《正統的学問への道》が開かれているかのようなフィクションを軸にしているところにあるのだ。

《学校でなすべき学習は、単なる知識の習得だけではない》と言う。その通り。しかし、学校では《単なる知識の習得》に終わってしまっている。《知識の習得を通して子どもは学問という奥の深い人間独自の世界を垣間見》なくてはならない、と続ける。その通り。しかし、そのように導く担い手が学校のどこに存在しているというのだろう。あたかもそのような教育はどの学校でも少なからず存在しているであろうのに、今どきの高校生は彼らに耳を貸さなくなってしまったと言わんばかりに聞こえる。筆者がそう思っているなら、あえて逆らわずに彼女の主張に即して共に歩んでみよう。そうすると、《正統的学問への道》を熱心に学習のなかで展開している教師に反して、その彼の授業を受け付けられない多くの生徒といった図式がみえてくる。そこで、なにが問題なのか。い

くら《正統的学問への道》に根差していようと、教師の語る言葉や学習姿勢や、長年培ってきた人生観などといったすべてのことが、今どきの高校生に伝わらず、無効に陥っているということだ。

一度目は悲劇として、その「伝わらなさ」は起こってくるかもしれない。だが、二度目は喜劇になってしまう。その「伝わらなさ」について真剣に考えることがなければ。非力、なのである。たとえ教師が深遠なる学習を生徒に説く力を秘めていたとしても、生徒に聞き入れられなければ教師はやはり非力なのだ。自分たちが非力であることがわかれば、この先なすべきことは明らかである。生徒を自分たちに振り向かせる力を付けていく以外にない。《学校でなすべき学習は、単なる知識の習得だけではない》と主張するなら、《単なる知識の習得》に終わらない、《学問という奥の深い人間独自の世界》へと生徒を強力に連れ出して、その世界がどれだけの魅力に満ちているかを垣間見せればよい。「わかりやすい授業」と「効果的な学習」に馴れきった生徒をそこから連れ出す力を発揮して、彼らが知らない未知の世界の輝きを一度でも味わわせてみればよいのだ。

しかし、論は自分たち教員の非力さには向かわずに、《近頃の生徒は本当に辞書を引きたがら》ず、泥縄式の学習方法で済ませる怠惰に向かう。したがって、学校という学習空間のフィクショナルな側面に目を向けることはしない。同時に、自らの論のフィクション性にもけっして目を向けることはしないのである。筆者の論じ方のフィクション性は、次の記述のなかでより一層際立ってくる。

《何年か前、ある著名な方が40代で声楽家を志し音楽大学に入学した。もともと声楽を学んでいたらしいが、あえて音大を目指した理由は、素人とプロの違いを感じたからだという。素人とプロでは、目標とするとところが異なり学び方も違うというのだ。だから、素人はどれだけ努力しても決してプロの実力に至らない。プロになりたかったら、最初からプロへの道を選ばなければならないのだ。》

私は学校で学ぶ英語の勉強方法一つをとってもこれに相当するのではないかと思う。昔の生徒は、面倒でも自分で辞書を引いて丹念に勉強をした。これは、その道の達人が、辞書や他の文献等を調べて、直に原典にあたる研究方法と本質的に同じである。

しかし、現在のように、プリントであれ詳細な解説書であれ、他人を介在させた鵜呑みの学習法は、言わば、「素人」の学習方法だ。その点、昔の学生は、最初からプロを目指す道を歩んでいたのである。得られた知識の量は同じであったとしても、今後の道の進み方が異なっていないか。正当的な学習方法を踏んで成長してきた場合は、その経験そのものが、将来の生き方においてそれこそ「役に立つ」のではないか。今の子どもが身につける学習方法は、言ってみれば、一生誰かに授業料を支払い続けなければならないやり方だ。そのままでは決して解説書を書く側には回れない、あなた任せの邪道である。》

プロを目指す人の事例を持ちだして、学校での勉強方法に重ね合わせようとするところに、筆者の見当違いが浮き彫りにされている。《素人とプロでは、目標とするとところ

が異なり学び方も違う」から、「素人はどれだけ努力しても決してプロの実力に至らない。プロになりたかったら、最初からプロへの道を選ばなければならない」というのは、よく了解できる。だが、「昔の生徒は、面倒でも自分で辞書を引いて丹念に勉強をした」そのやり方は、「その道の達人が、辞書や他の文献等を調べて、直に原典にあたる研究方法と本質的に同じ」だから、「昔の学生は、最初からプロを目指す道を歩んでいた」ことになり、学校での勉強方法は「自分で辞書を引いて丹念に勉強」をすることに尽きる、といった論理の運び方には納得できない。昔の生徒が「面倒でも自分で辞書を引いて丹念に勉強をした」のは、当時は豆単や詳細な解説書がなかったからであって、もしそれらが手に届くところにあったなら、昔の生徒も今の生徒と同様な学習方法になっていたことは歴然としている。

昔の生徒がテレビを見なかったのはテレビがなかったからであり、昔の生徒が片道数^{キロ}の道を歩いて通学していたのも交通手段が発達していたからである。「昔の生徒は、面倒でも自分で辞書を引いて丹念に勉強をした」というのと、それらは全く同じことだ。テレビを見ることがなかったから、テレビに影響されることもなければ、勉強時間も少しは多かっただろうし、歩いて通学していたから足腰が鍛えられたといえるとしても、「自分で辞書を引いて丹念に勉強をした」からといって、徒歩通学で足腰が鍛えられたからといって、「昔の学生は、最初からプロを目指す道を歩んでいた」ことにはならなかった。筆者自身書き留めているように、「素人とプロでは、目標とするところが異なり学び方も違」っていたからだ。同じ辞書を引いているようにみえたとしても、生徒とその道の達人とでは全く異なっていた。豆単や解説書がないから仕方なく辞書を引くのと、豆単や解説書があっても自ら進んで辞書を引くのが、同じである筈がなかった。

筆者は昔の学生の学習方法を賛美するあまり、あたかも彼らが「正統的な学習方法を踏んで成長してきた」かのようなフィクションを組み立てるが、生徒がいくら「自分で辞書を引いて丹念に勉強をした」としても、所詮「素人」の勉強方法にすぎず、勉強の「プロの実力に至らない」。皮肉なことに、筆者が持ちだした音楽のプロの話は、学習方法において「昔の学生は、最初からプロを目指す道を歩んでいた」どころか、「素人」にはほかならないことを浮き彫りにしていたのだ。昔の学生がプロの学習方法であって、今の学生が「素人」の学習方法であるわけではない。昔も今も「素人」の学習方法であることに変わりはなく、学生の学習環境が激変したことによって、昔の学習方法がかかえこんでいた致命的な点が一挙に拡大されてしまっただけではないのか。

「そろそろ我々は目先の効率を求める誤謬を正すべきではないのか。学校で習得すべきものが、結果だけであってはならないのだ。一見、遠回りで合理性に欠ける方法であっても、正統的な学習のあり方こそが、実は、子どもには、自らの人生と向きあう力を与え、己を高めさせ、責任を持って人生を歩んでいく礎となるのではないかと私は思う」と、筆者は論稿を結ぶ。言われていることに全く異論はないどころか、賛意を表したいのだが、筆者があたかも昔の学生の学習方法が「正統的な学習のあり方」を踏んでいた

かのようなフィクションを持ちだして “ 昔に戻れ „式の主張に強く固執することに無意味さを感じているだけなのだ。《正統的な学習方法》など昔もなかったから、それを新しく築かなくてはならないと主張すべきなのである。そのためにはなによりも、筆者を含む教師自身が「わかりやすい授業」と「効果的な学習」にどんどん押し流されていく学習環境に真正面から立ち向かう必要があるだろう。ただし、筆者以外のどれほどの教師がその必要性を痛感しているのだろう。

この論文からホリエモンの発想が湧出してくる土壌が垣間見られると同時に、不思議なことに、「自分の頭で考え、自分の言葉で表現する」という文言が一つも見当たらない。「正統的な学習の復活を」願うにしても、その根底には「自分の頭で考える」ことがなによりも不可欠であり、《自らの人生と向きあう力》も「自分の頭で考える」なかから育成されてくる筈だ。ここで想起されるのは、当時14歳の岡山の中学生だった山本彩加の『私の正論』（03. 3. 4付産経朝刊）入選論文「討論重視の授業で深まる思考力」である。彼女はシアトルの学校のサマープログラムに参加した《経験から、日本人が自己主張が苦手だとよく言われる理由は、曖昧さを好む文化や謙虚さではなく、思考の浅さにあると確信した。自分の考えに、よく考えたという自信があれば、それを堂々と語れるはずだ》と喝破した。

彼女は自分が受けてきた小学校教育では、《適当にそれらしく聞こえるような答えを出し続けた結果、深く考えないことに慣れてしま》い、《教師があらかじめこうなるようにと結果を期待して展開する授業では、生徒の自由な発想や深い思考力といった能力は閉ざされてしまう。生徒一人一人が問いかけを真剣に受け止め、人に頼らずしっかりと考えることができるようになってこそ学ぶ意義があるのではないか。「生きる力」とは、自分でよく考え、自分で判断する力だと思う。深い思考力をつけることが、これからの教育の課題だと私は考える》と表明し、IT教育や英語教育についても、《いくらパソコンや英語という便利な道具が使いこなせても、伝える中身が薄っぺらではコミュニケーションは成り立たない。宝の持ち腐れだ。このような教育ではさらに思考力が鈍化するのではないかと心配だ》と憂慮する。

彼女の考えでは、《物事を深く考えるようになるためには、国語や社会等の授業の中にディスカッションやディベートをもっと取り入れるべき》であり、《その時、教師の役割はとても重要になってくると思う。生徒の考え方を引き出すヒントを出したり、興味をそそるようなテーマを選ばなくてはならない。先生の工夫と指導力が試される。これは算数や国語の授業でも同じで、授業を聞くも聞かないも先生の話が興味深いかつまらないかで決まる》と、簡潔に要諦を衝く。彼女の短い文章から伝わってくるのは、《深い思考力》のなかから自分の人生が練りあげられていくというメッセージであり、「わかりやすい授業」と「効果的な学習」の荒廃にあっても、すつくと一本の棒の如く直立した彼女の姿勢によって我々は無限の励ましを与えられつづける。

2006年4月23日記

